

令和元年6月17日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02335

研究課題名(和文) 冷戦期トランスパシフィック・アメリカ文学研究 制度形成と美的形態の動態的交渉

研究課題名(英文) Transpacific American Literary Studies and the Cold War: Institutional Formations and Aesthetic Forms

研究代表者

井上 間従文 (Inoue, Mayumo)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：50511630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では戦後の米国と東アジアを横断する地政学的空間にて、諸ナショナリティ(国民・民族)の形象がいかんして文学・文化の表現フォーム(形式)を通して自然化・妥当化され、またときには抵抗や刷新の契機にさらされたのかを検討した。米国の軍事的・政治的覇権のもとに東アジアのナショナリティが生を許容される「人口」の形象を規定しているとの理解のもと、軍事同盟や開発経済といった「制度形成」と文学・文化における「表現形式」との関係性と共犯性、緊張関係と齟齬などを主に同時期のアメリカ文学、日本語圏文学から読み取った。成果としては国外のジャーナル等に掲載された論文7本を含む17本の論文執筆を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果としては1)ミシェル・フーコーが提示した「生政治」論における「人口」の生産と表象を基盤とする「生」を強いる社会形態の研究を、トランスパシフィック空間の文学研究へと応用した点、2)文学作品を「読む」ポリティクスのある方が特に冷戦化の日米の大学においていかに制度化されたかに光をあて、日米におけるナショナルな生政治の空間を表象と、それを通して進展したトランスナショナルな軍事と資本の諸プロトコル(取り決め)の変容と深化との関係性を検討した点、3)さらにはこれらを通して地政学的制度変容と文学的表現形式との複雑な関係性を米国、日本、琉球列島などを横断するかたちで研究対象としたことにある。

研究成果の概要(英文)：This research project illuminated the ways in which literary forms often naturalized and legitimated but at times contested and interrogated the figurations of nationality in the post-1945 geopolitical space that traverses the U.S. and East Asia. By taking into account the Foucauldian understanding of biopolitics whereby the figures of "population" are actively induced and produced so as to enforce a narrowly delimited modality of "life" upon them, this research project examined how "social formations" such as military alliance and developmental economy and "expressive forms" found mostly in American and Japanese-language literary works of the period formed relationships defined by mutual complicity and resonance, on one hand, and critical tension and recalcitrance, on the other.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：トランスナショナリズム 統治性 生政治 美学理論 新批評 冷戦 アメリカ研究 沖縄

1. 研究開始当初の背景

トランスパシフィック・アメリカ文学研究は米国の文学研究において、19世紀から現在に至る移民、戦争、移動などアメリカと東アジアおよびアジア太平洋地域との密接な関係と交渉とを研究対象とすることを目的として2000年代以降に著しく発展した分野である。しかし Paul Gilroy や Brent Hayes Edwards などが先鞭をつけたトランスアトランティック研究が権力、組織、人物等の動きを実証的に追跡した上で、文学・文化テキストの特徴にも綿密な視点を向けたのは異なり、トランスパシフィック・アメリカ文学研究での主要な成果はアジア太平洋を主題とするアメリカ文学作品の精読から社会的テーマを解読するものがこれまで多かった。

つまり、そこでは1) 軍事同盟や二国間条約などを含む地政学的制度の形成過程と、2) これら制度形成が文化と教育の領域における想像力の枠組みに及ぼす影響や拘束力が、文学作品を読むにあたっての所与の社会的文脈とはされても、それ自体が詳細な研究の対象となることは稀であった。

本研究はこうした先行研究の背景をもとに、地政学的命題が想像力の枠組みに一定程度規定力を及ぼしながらも、同時にこうした制度的枠組みそのものを問いに付すような文学作品の表現フォーム(形式)が書かれてきたことを明確化することを目指した。つまりはこれまで米国のトランスパシフィック・アメリカ文学研究の枠内では十分に光が当てられることのなかった、地政学の制度形成と文学表現の形式的特徴との間の緊張関係そのものを研究対象とすることとした。

2. 研究の目的

本研究はミシェル・フーコーが「生政治」論にて展開した、「人口」の生産と表象を基盤としながら、これら「人口」に括られる諸個人に「生」を強いる社会形態の研究を、特に冷戦期のトランスパシフィック空間のアメリカ文学研究へと応用することを一義的な目的の一つとした。その上でより綿密に小説や詩といった文学作品を「読む」方法論そのものが、例えば米国発の批評理論である「新批評」の冷戦期日本における制度化などをも経て、冷戦期米国と日本という非対称な軍事同盟を結ぶ国民国家におけるナショナリティの図式の安定化と再構築に寄与した過程について調査を行うことを目的とした。

さらにこうしたトランスパシフィック地域の諸ナショナリティを連動させることで機能する軍事同盟や開発経済、さらにはそれらが強いる生を引き受けざるをえない「人口」の表象と生産とをジュディス・バトラーが「戦争の枠組み」と呼ぶ美的かつ政治的な「枠組み」論へと接合した。そうすることで、強いられることのない「生の形式」が米国、日本、米軍統治期の琉球列島に発表された文学作品に主題と形式の双方に現れていることの読解を最終的な目的として掲げた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、まずは前述のフーコー、バトラー、さらには酒井直樹などの著作を丹念に再読することで、複数の国民国家とそれらの「人口」の「生」に介入するために発動する権力のあり方が常にある種の美学的拘束を基盤として存在していることを重視した。たとえばフーコーにおける諸力の「装置」(dispositif)、バトラーにおける哀悼可能性の「枠組み」、酒井における形象の「図式」などがそれにあたる。美的領域において「生」を許容される形象がいかにつくられ、「死」へと放逐される形象がいかにつくられるかを理論的手法の根幹に据えることで、地政学制度形成と文学的表現形式との間に横たわる共犯性と緊張関係の双方を見ることが可能となった。

また実際に文学読解がいかにか冷戦期の米国と日本で制度化されたかをめぐってはアーカイブ調査をその研究方法とした。米国の国立公文書館、ロックフェラー財団アーカイブなどで同時期の「アメリカ文学研究」の制度化をめぐる資料を収集し、読解を行った。またアーカイブを単に実定化された事実の集積としてではなく、情動的な兆候をも読み取れる場として捉え返すように努めた。

以上の二つの方法論の成果に則って、文学作品において生政治の制度化から逃れる人々の生とその共同性を示唆する可能性をめぐるの精読を行った。

4. 研究成果

研究成果としては英語圏の学会誌や共著論集に掲載された代表者の著作(論文4本、書評1本)および日本語の論文(4本)、分担者による英語論文(2本)および日本語の論文(5本)がある。特に代表者の英語論文“Objects across the Pacific: Poetic Interruptions of Global Sovereignty in Charles Olson and Kiyota Masanobu”(2017)は米国の人文理論誌 *Discourse* に掲載され評価を受けた。同論文では、植民地を持たずに各地の国民国家形態をつなぐかたちで軍事と経済とを連動させる「グローバル主権」とも呼ばれる新たな帝國的体制のもとで、この連関の暴力性に敏感であるがゆえに、国民国家形態やそれが依拠する民族の形象から逸脱しつつける人々の共同性を描いた詩人としてチャールズ・オルソンと清田政信を取り上げた。さらに両者が表象体系から零れる事物のエネルギー的側面を「オブジェクト」(オ

ルソン)、「オブジェ」(清田)として捉えていたことに着目し、生政治の制度形態から逃れる表現形式としてこれら「事物」の詩学についての検討を行った。同論文は日本国内でも一定の評価を得たため、学術誌『現代思想』の特集号「広島思想—いくつもの戦後」に論文「生政治の線引きと分かち合う線描 ヒロシマから思考するチャールズ・オルソンとベン・シャーン」を招待論文として掲載した。同論文では前衛詩人であるオルソンと社会主義リアリズム画家のベン・シャーンが第二次大戦中に米国戦争情報局でパンフレット共作などを行った歴史に光をあて、両者が戦後に個別に発表した原爆投下や水爆実験を主題とする作品において、生政治が要請する「人口」の固定された線引きを揺さぶる動的な「線」の表象と形式があることを読み取った。

また米軍統治下の琉球列島を節点とする「戦争の枠組み」をめぐるのは米国の学会誌 *American Quarterly* に論文 "The Inter-state 'Frames of War': On 'Japan-U.S. Friendship' and Okinawa in the Transpacific" を掲載した。この論文では沖縄の日本本土「復帰」あるいは「返還」をめぐるいわゆる「沖縄密約」を通して日米「友好」という言説が自明なものとして制度化されたことを批判的に検討し、その上でネーション間の「友好」に収斂することのない友愛のあり方を文学および芸術に暫定的に位置付けるための理論的視点をまとめた。ここでは「米国」、「日本」、「沖縄」といったネーション的な形象のいずれをも自明とすることを丹念に退けることで、ネーションをフェティッシュ化することなく、権力の効果としてのみ眼差す批判的視座が提示できた。

分担者は、トランスパシフィックな軍事同盟とそのポリシーがいかに文化的なものとなつてその覇権と統治の形態を制度として作り上げていくのかについて、これまでの研究の実績に対し依頼を受けた2本の論文に纏めた。"The Reception of American Literature during the Occupation" は、1990年代以降の冷戦期文化研究の流れを踏まえ、アーカイブ資料で裏付けを行いつつ、占領期においてアメリカ文学がGHQ、国務省、ロックフェラーなどの民間財団の後援を受けながら脱軍事化・民主化のプログラムの重要な一翼を担っていたことを詳細に跡づけた。またトランスナショナル・アメリカン・スタディーズのハンドブックに収録された "Translations of American Cultural Politics into the Context of Post War Japan" においては、アメリカ文学の翻訳やアメリカ研究書の翻訳が文化政策を円滑に進めるための有効な手段であったことを一次資料から裏付けたうえで、川端康成をはじめとする日本文学の英語への翻訳が、アメリカから導入された批評形態と親和性を保ちながら紹介されることで、日本(の文学)を西側諸国の文化へと再度導入する役割を果たし、またそれが軍事ポリシーと連動するものになり得ていたことを論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

1. Hiroimi Ochi, "Translations of American Cultural Politics into the Context of Post War Japan." *Routledge Companion to Transnational American Studies*. Routledge, 164-172, 2019. 査読無 (図書所収論文)

2. Mayumo Inoue, "Nations in Shame and Art's Shame: Towards a Radical Politics of Image and Affect around 'Okinawa.'" *Inter-Asia Cultural Studies* vol. 19, no. 4, 536-550, 2018. DOI: 10.1080/14649373.2018.1543306 査読有

3. Mayumo Inoue, "Review: Undoing the Form/Matter Divide in Avant-Garde American Poetics." *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts*. Vol. 59, no. 3, 501-505. 2018. DOI: 10.13110/criticism.59.3.0501 査読有

4. 井上間従文、「結晶たちの「ヒロシマ」—諏訪敦彦の『H Story』と『A Letter from Hiroshima』」
『忘却の記憶 広島』月曜社, 2018. 査読無 (図書所収論文)

5. 越智博美、「帝国の裡に取り憑くもの——アメリカ南部の奇妙な果実」、『憑依する英語圏テキスト——亡霊・血・まぼろし』音羽書房鶴見書店、131-157頁、2018年。査読無 (図書所収論文)

6. Mayumo Inoue, "The Inter-State 'Frames of War': On 'Japan-US Friendship' and Okinawa in the Transpacific" *American Quarterly* vol. 69, no.3, 491-499. 2017. DOI: 10.1353/aq.2017.0043 査読有

7. Mayumo Inoue, "Objects across the Pacific: Poetic Interruptions of Global Sovereignty in Charles Olson and Kiyota Masanobu" *Discourse: Journal for Theoretical Studies in Media and Culture*, vol. 38, no. 3: 297-326, 2017. DOI: 10.13110/discourse.38.3.0297 査読有

8. 井上間従文、「鼓膜における受苦と情熱—新城兵一の詩作と「言語的共感域」」『宮古島文学』12巻、131-149頁、2017年. 査読無
9. 井上間従文、「ジェンダーと人権の切分法—崔洋一と新城兵一の「辺野古」」『個人的なことと政治的なこと—ジェンダーとアイデンティティの力学』、彩流社、84-109頁、2017年. 査読無（図書所収論文）
10. Hiromi Ochi, “The Reception of American Literature during the Occupation.” *Oxford Research Encyclopedia of Literature* (2017), DOI: 10.1093/acrefore/9780190201098.013.163. 査読無
11. 越智博美、「女から産まれる——人種の問題を引き起こすもの」『マーク・トウェイン——研究と批評』16巻、10-18頁、2017年. 査読無
12. 越智博美、「結婚という政治——『すべての王の民』における「結婚」」、『個人的なことと政治的なこと——ジェンダーとアイデンティティの力学』、彩流社、211-233頁、2017年. 査読無（図書所収論文）
13. 井上間従文、「生政治の線引きと分かち合う線描—ヒロシマから思考するチャールズ・オルソンとベン・シャーソン」、『現代思想』44巻15号、164-177頁、2016年. 査読無
14. Mayumo Inoue, "Cinematic Folds underneath 'East Asia': Humorous Traces of History in *H Story* and *Secret Sunshine*" *Tamkang Review* (Special Issue on Problematizing East Asia), vol. 46, no. 2: 63-85, 2016. DOI: 10.6184/TKR201606-4 査読有
15. 越智博美、「007は誰と戦うのか——冷戦を愛するスパイ」、細谷等他編著、『アメリカ映画のイデオロギー——視覚と娯楽の政治学』、論創社、47-78頁、2016年. 査読無（図書所収論文）
16. 越智博美、「文化の占領とアメリカ文学研究」、『*The American Review*』50巻、21-43頁、2016年. 査読有

〔学会発表〕(計 27 件)

1. Mayumo Inoue, *Beyond Imperial Aesthetics: Theorizing Art and Politics in East Asia* (Theorizing beyond Imperial Aesthetics in East Asia), University of California at Berkeley, Center for Japanese Studies, 2019.
2. 井上間従文、「「帝國的編成」の動態性について—アーカイブ、情動、諸力」、『国際シンポジウム「(帝国(間)を巡る人流—多様な帝國的主体の離散と集住)」』、同志社大学、2018.
3. Mayumo Inoue, “The Production of Amateurs.” "Souths of Asia: Aesthetics, Theory, Archive," A Joint International Workshop with Asia Theory Network, National Taiwan University, 2018.
4. Mayumo Inoue, “The Aesthetic “Routing” of the Common in Deleuze and Nancy.” 11th International Deleuze and Guattari Conference, Campinas, Brazil, 2018.
5. Mayumo Inoue, "Objects in Resistance: A Surrealist Current in Post-war Okinawa." The CCNY Annual Japan Studies Lecture. City College of New York. 2018.
6. Mayumo Inoue, “‘Becoming 'Objects': Charles Olson’s Field Poetics in the Transpacific.” The Twelfth Quadrennial International Comparative Literature Conference: Literature, Life, and the Biological. Tamkang University, 2018.
7. Hiromi Ochi, “Cultural Diplomacy and Cultural Transformation: Cultural Programs in Post-war Japan.” English Department Lecture Series, Iowa University. 2018.
8. Hiromi Ochi, “Seminar in the Ruins: The Saltzburg Seminar and Its Significance in Cold War Cultural Diplomacy.” The Asian Conference of Arts and Humanities 2018, Kobe Art Center, 2018.

9. Hiromi Ochi, “Constructing an Exceptional Region: Recurrent Emergence of Appalachia.” American Studies Association Annual Conference, Chicago, 2017.
10. Hiromi Ochi, “Reintroduction of American Literature and Cultural Re-orientation of Japan.” MLA2017, Philadelphia, 2017.
11. Mayumo Inoue, “ ‘Form-giving Fire’ in the Field of Race: On Poetic Forms and Living Labor.” Association for the Study of Arts of the Present/9 (ASAP9), Oakland, 2017.
12. Mayumo Inoue, “Art’s Shame and Nations in Shame: Toward a Viable Image Politics in Okinawa.” Conflict, Justice and Decolonization II: Paradigm Shift of the Colonial-Imperial Order and the Aporia of Human Sciences. National Jiao Tong Hsing University, 2017.
13. Mayumo Inoue, “Charles Olson, Herman Melville, and the Bio-political Frontiers of the Pacific.” English Department Lecture Series, Northern Arizona University, 2017.
14. Hiromi Ochi, “Re-introduction of American Literature in Post World War II Japan.” International Symposium: Discourses and Aesthetics of Transpacific America/Asia, Hitotsubashi University, 2016.
15. Mayumo Inoue, “Labor beyond Labor in Artistic Act and Political Activism.” Asian Cultures in Dialogue: Politics and the Arts. Hong Kong Univeristy, 2016.
16. Mayumo Inoue, “The Colors of Thinking after the Vietnam War.” Global Aisas: Critical Aesthetics and Alternative Globalities. National Singapore University, 2016.
17. Mayumo Inoue, “ ‘Being of the Sensible’ and its Muses.” International Deleuze Studies in Asia 4th Conference. Seoul National University, 2016.
18. Mayumo Inoue, “Politics and Aesthetics of Heterotopic Skins: Ryudai Takano's and Satoko Nema's Photographies.” Untimely Encounter 2016: Moment. Substation, Singapore. 2016.
19. Mayumo Inoue, “The University and the Inexhaustible Common” Liberal Arts in the Age of Globalization: UIC 10th Anniversary Symposium. Yonsei University Underwood College, 2016.
20. Hiromi Ochi, “Ambivalent Negotiation with Modernism and the Recreation of Post World War II Japan.” MSA17, Boston, 2015.
21. Mayumo Inoue, “Olson's ‘Ruin’: A Genealogy of Race and Origin of Objects in the Pacific.” MSA 17, Boston, 2015
22. Mayumo Inoue, “Toward an ‘Invisible Commune’: Poetic and Painterly Tracings of the Sensible in Postwar Okinawa.” 2015 Asia Theories International Symposium. National Chung Hsing University, 2015.
23. Hiromi Ochi, 「文化の占領とアメリカ文学研究」アメリカ文学会九州支部第 62 回大会特別講演、九州大学、2016.
24. Mayumo Inoue, “Framing Human Rights: The Politics of Knowledge Production.” The 2015 Summer Institute in Asian American Studies: The Subject(s) of Human Rights. National Taiwan Normal University. 2015.
25. 越智博美、「動員をめぐる言説——第二次世界大戦と文学者」, 日本アメリカ学会第 49 回年次大会、国際基督教大学、2015.

{ 図書 } (計 1 件)

1. Mayumo Inoue and Steve Choe (eds.), *Beyond Imperial Aesthetics: Theories of Politics and Art in East Asia*. Hong Kong University Press, 2019. 325 pages.

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：越智 博美
ローマ字氏名：Hiromi Ochi
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院経営管理研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：90251727

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。